ペンギンの会ニュース

『走り続けた三宅ちゃん／ほな、また三宅さん／本当にありがとう』特集　No.35　2018.01

ペンギンの会を支えて下さっている皆さん、いかがお過ごしですか？

昨年11月12日の「東日本大震災・福島原発事故および熊本地震の被災障害者支援街頭カンパ」に参加して下さった皆さん、冷え込む中の3時間をいつものようにビラをまき、風化させないために被災地の状況をアピール下さり、本当にお疲れ様でした。私も参加する予定でしたが、7日の夜から背中が激しく痛み、薬を飲んでも頭痛が取れず、一睡も出来ない日が続いていたので、初めて当日に参加が出来ませんでした。次回は何とか参加しますので、またご協力をお願いいたします。

11月26日には、1年前に亡くなられた三宅さんの追悼イベントを行ないました。60数名の方たちと、生前の三宅さんのスライドを見て、いつもように飲んで歓談し、そして、参加者それぞれに三宅さんとの関わりを話していただきました。目の前で、三宅さんのお元気だった頃の姿と共に、三宅さんの前に亡くなった先輩たちの姿が映し出され、そこに私もチラホラ映っていたりで、いろいろなことを思い出していました。ペンギンの会での長い年月を通して、いっしょに三宅さんと歩んで来れたことに、心から感謝しています。三宅さんは「障害」を持つ仲間や、社会的に弱者の立場に置かれている人達に寄り添い、自分のことより他者の為に行動し、どんな状況の中でも最後まで、あきら

三宅さん追悼イベントの影膳

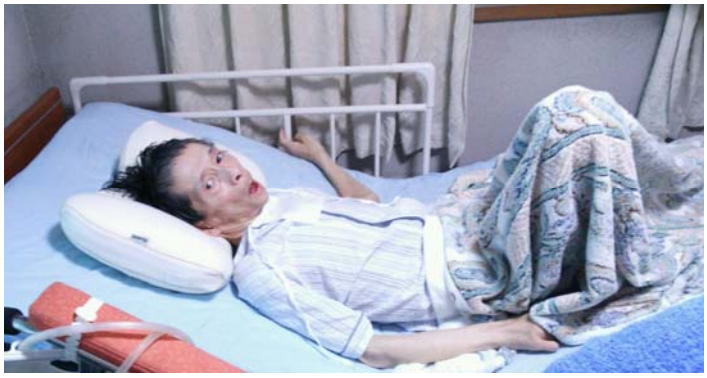
めるという事を選ばない人でした。私も少しでも、三宅さんの意志に近づけるように懸命に生きねばと思います。こうして、追悼イベントに参加された皆さんの中にも、そして私の中にも、いつも共に在り、見守ってくれている三宅さんを想います。三宅さんの存在は、私たちの中から消えることはありません。

ペンギンの会を不断に覚えて、支えて下さっている皆さんの日常も、いろいろなことがあり大変だと思いますが、何とか踏ん張って、生き抜いてくださいね。私たちペンギンの会それぞれも瀕死ではありますが、なんとか生き抜いています。これからもペンギンの会を、よろしくお願いいたします。

李清美

繁 朋子

2013年からの闘病中、何回もの壮絶な手術も何のそので、たびたび奇跡的復活をし、いつも何事もなかったかのように退院して皆の前に現れた「不死身の三宅さん」。だけど自身が言い出しっぺの昨年8月7日の納涼会には体調が悪化して出席が叶わなかった。それでも遠方から出席してくれた友人たちが自宅を見舞うと、ベッドから起き上がり、車イスや愛用の椅子に座り替えて応対されたという。ある方がfacebookにｕｐされたその時の写真を見たが、その2日後に亡くなるとは思えないような、普段に近い三宅さんが写っていて、やっぱり「不死身の三宅さん」だった。



2016年8月7日　参加できなかった納涼会の夜　三宅さん自宅にて

8月9日に三宅光男さんが亡くなってからほぼ1年4ヶ月経った11月26日にペンギンの会主催で何らかの形で三宅さんの会をすることになった。「去年の納涼会に三宅さんは出席できなかったので、心残りだろうし同じ仲間に呼びかけて飲み会をしたい。」「三宅さんの追悼会にはしたくない。まだ亡くなったと思っていない。」「三宅さんには本当にお世話にばかりなったので、心からありがとうを言いたい。」と、皆がそれぞれの思いを出し合い、そのままの気持ちをタイトルに付けて会をすることになった。

当日は全国から60名あまりの方々が集まってくださり、三宅さんの子ども時代から最近までの写真が繰り返しスライドショーで映し出された会場で、前中央寄りテーブルに三宅さんの陰膳と福島の友人たちが持参してくださったお酒を供えて、献杯をして始まった。各テーブルにマイクを廻し、代表して1名ずつが三宅さんへの気持ちや自分との関わりについて話してくださった。

三宅さんの最期を小山さんと共に看取ってくれたSさんは、三宅さんが亡くなってからずっと「三宅さんの闘病中のことは話したくない。(話せない)」と言っていたのだが、今回は時の経過とともに少しは気持ちがほぐれたのか、三宅さんの最期の様子と三宅さんへの感謝の気持ちを語ってくださったのがありがたかった。

三宅さんが青い芝の会で活躍されていた当時の同志であるFさんやMさんは、「三宅さんはすごく頭の回転が速い人で、次に何をしなければならないかがすぐにわかる人だった。」という人となりとともに、現在の障害者が抱える問題についても一刀両断に語ってくださった。

現在、障害者への自立生活支援が65歳以降は老人介護保険の枠にすり替えられようとしていることの問題点を制度など何も無かった70年代に三宅さんたちと共に闘い、ボランティアの介護者を集めて障害者が自立生活を始めた当時のもともとの理念から捉え直し、「全く筋違いのやり方で、こんなことは絶対に承服できない！」と。Fさんによると、老人介護保険はその制度の目標が、それぞれの病状に応じたやり方で生きることを保障するのではなく、あくまでも健常であることのみが前提の優生思想の考え方からできているので「老人を健常者に戻す」こと(全く非現実的)であり、「生存権を保障する」当たり前の権利として重度障害者自身が獲得した自立生活支援の制度とは考え方が全く違う別物だから一緒にしようとすること自体筋が通らないということだった。

Mさんは「だいたい障害者にはシステム化というものが合わない。システムに当てはめようとすること自体が間違ってる。制度がなかった時代から介護者を自力でかき集めて自立生活を成り立たせてきた三宅さんとか我々は、何も贅沢な生活がしたくて要求したのではない。本当に生きるために最低限必要なことを要求してきただけや。障害者が生きていくためにはシステムなんかに頼らない生き方を身に付けんとあかんのや。」と話してくださった。Mさんが話しておられる途中に他の人の話し声がガヤガヤして、言語障害の言葉が聴き取りにくい場面があったが、Mさんは「大事な話をしようとしているのだから、

聴きたくない人は会場から出ていけ！」とキッパリと一喝してから話を続けられた。そういうところからも昔から障害者としての生き方を切り拓いて来られた方々の並々ならぬ気概を感じさせてもらうことができた。

三宅さんは青い芝で活躍なさっていた時代のことは「聴かせてください。」と何度お願いしても「自分は辞めた人間やから、今も続けてる奴らに失礼やから話はせん。」という信念で語ってはくださらなかったけれど、同志の方々が語ってくださったことから三宅さんが決して言葉にはされなかった思いを充分に感じさせてもらうことができて本当に意義のある会となった。ご出席くださった皆様本当にありがとうございました。

東　純之介

三宅さんが亡くなってから一年経ちましたがそれでもなお多くの人が三宅さんの追悼のために集まってくださり、改めて三宅さんの偉大さを痛感します。

僕が三宅さんを凄いと思ったことのエピソードの一つは、大学進学の際に学費に困っている時に何も言わずにポンと大金を出してくれたことです。本当にありがたいなあと思いました。

三宅さんのことを忘れないためにもまた後世の人たちにもこんなに凄い人が居たんだということを語り継いでいきたいと思いました。

『三宅さんのこんな 話 も少し』

ユグチマコト

かつての“青い芝”で、過激かつ急進的な障害者解放運動に身を投じていた三宅さん。そのあたりの話をご本人に伺おうとすると、三宅さんは大抵の場合、いたずらっぽい笑顔と愛嬌のある物言いで、『あれはワシから数えて五代前の三宅光男やがな。そんな昔のことワシ知らんがな』という感じで、上手に煙に巻いてしまわれることが多くありました。しかもその煙に巻くタイミングの見事さと言ったら！気づけばいつの間にか三宅さんの話が、別の話題に移ってしまっていました。

2005年9月　ペンギンの会 旅行@神戸

三宅さんは主に70年代、関西青い芝で事務局長をしておられたということですが、自分たちへの差別的な諸々と闘う際の“つばぜり合い”や、各地で自立生活運動を展開していた障害者仲間である“猛者連”たちとの、“丁々発止のやりとり”の中で、あの絶妙な人付き合いの呼吸が培われたのだと思います。

そんな“海千山千”の三宅さんには“右も左もわかっていない”ユグチなどは格好の“おちょくりの対象”だったにちがいなく、三宅さんの戯れ口をユグチが何でも生真面目に受け答えしようとするのを逆手にとられて、“ちょっとしたドツボ”にハメられてしまうことがしょっちゅうでした。

この稿では“数え上げるとキリがない”三宅さんによる“おちょくられ”のエピソードを一つ。

ペンギン有志で北海道を旅したある年の夏、その帰洛の際の千歳空港。利用する便のチェックインカウンターでは繁忙時の乗客をつつがなく搭乗させるべく、ひっつめ髪の乱れもあらわに立ち働く女性職員２名。カウンターから少し離れたところで、その様子をぼんやり眺めていたユグチ。そのユグチの腕をつつき、何やら真顔で話しかけてきた三宅さん(“真顔”というのがいかにも意味深で)。

三宅さん『おい、お前、あそこにいるネーちゃん２人のうち、どっちがエエと思う？』

何か必要なことでも話しかけられたのかと思っていたユグチは、当初まったく言葉の意味を解せず、

ユグチ『は!? いったい何ですか？』
三宅さん『いや、せやから、あそこの(カウンター)ネーちゃん２人や』
ユグチ『へー!?いきなり何を聞くんですかー!?そんなことよぅ答えられませんやん!?』
三宅さん『エエから、どっちや思うねん？言うてみ？』

この時点で常ながら、完全に三宅さんのペースにさらわれたユグチ。その上、生来の生真面目さがこんな時にも頭をもたげて来て、(答えないと三宅さんに悪いやろか？)、などと見当ちがいなことを思い始め、次に、(まぁ三宅さん言語障害あるし、あのお姉さんらには聞きとれてないやろうし大丈夫やろ)、そう考えたユグチは仕方なく、なるべく小声で、『あ、あの向かって左の人かなぁ…』。そう答えて、しばらくカウンターから眼を反らしていると、何やらいたずらっぽくニヤニヤする三宅さん。ギクリとして振り返るユグチを見ているカウンターの２人。笑いをこらえながらも、どこかまんざらでもない様子が目元口元に浮かぶ“向かって左の”女性。そしてその右隣に、『アタシがなんでアンタなんかに品定めされなきゃいけないのよ!?』という表情をモロに浮かべてユグチを睨むその同僚。２人を見て、草むらでヘビを踏んだような顔になりつつも、声を出すわけにもいかず、(ちょっとぉ、丸聴こえですやんか三宅さ～ん!? 勘弁してぇな、もぉ～!?)と無言でなじるユグチに、(いや～、引っかかりよった引っかかりよった～)と、これまた無言で大口を開いて会心の笑顔の三宅さん。その後は逃げるようにカウンター前から離れたんでしょうが、そんなことは全く記憶にありません。

帰洛ののち、ペンギンのある方にその顛末を話して、『ホンマ往生しましたわ～』と愚痴ったら、三宅さんの言動をよく知るその人に、『んなもん、いちいち相手にしてっさけじゃ。何でも律儀に返事なんかせんと放っといたらエエんじゃそんな時は』とかえって怒られてしまいました。

2006年9月　ペンギンの会 旅行@岡山

以上、自分でもズレ気味の生真面目さが、いたずら好きの三宅さんには持ってこいの“餌食”になってしまった話なんですが、思えばユグチは、三宅さんに年がら年中こうして“おちょくられ”ながら過ごしていたと言ってもいいでしょう。

ペンギンの会ＨＰ上に「三宅光男さん追悼ページ」が完成

三宅光男さんが亡くなり１年半が経ちました。（２０１８年１月現在）

２０１７年１１月末にはペンギンの会主催の三宅さん一周忌企画「走り続けた三宅さん、ほなまた三宅さん、本当にありがとう！」が執り行われました。

２０１７年末、同企画に参加できなかった方々や、生前の三宅さんの姿をいつでも見たい方々のためにペンギンの会ホームページ上に「三宅さん追悼ページ」が完成しました。(http://pengin-kai.jpn.org/miyake.php)

仏教形式ならばお盆やお彼岸に、その他いつでも気が向いたときにお墓参りの代わりにご覧くださいませ。

なお出来ましたら本ページの内容を更新していきたいと思いますので、三宅さんに関する皆様の秘蔵の写真や今だから言える秘話などがありましたらペンギンの会までお送り下されば本ページに掲載させていただきます。

よろしくお願いいたします。

ペンギンの会ＷＥＢ担当　繋周作

自立障害者グループ　ペンギンの会

〒612-8411

京都市伏見区竹田久保町62番地足立ハイツ竹田132号

TEL/FAX:075-755-8177　　E-mail:pengin.kai@gmail.com

HP :http://pengin-kai.jpn.org/　「ペンギンの会」で検索